

終末主日を迎えました。教会の一年の歩みがまもなく終わりを迎えようとしておりますが、そこで、新たな一年を希望のうちに迎えるためにも、1年前のこの時のことを振り返りつつ御言葉に聞いて参りたいと思います。今年のクリスマスは、感染者数が日増しに増える中で迎えるものでした。そのため、かなりの緊張感をもってアドヴェントを過ごしたことを覚えております。では、今年のクリスマスはどうか。現状では、昨年のような状況でないため、もしかしたらとの思いはあるのでしょうか。けれども、状況が完全に収束したわけではない以上、やはり例年通りというわけには参りません。ですから、今年も私たちが期待するような、そんな心躍らせる楽しいクリスマスとはならないのでしょうか。しかし、たとえそうだとした場合、私たちにあって、やはりクリスマスは心の底から喜びを覚えるものです。それは、私たちが過ぎ去った一年をしっかりと終えて、その上で新しい一年を迎えるものでもあるからです。そして、そのために私たちに与えられたものがこの日の御言葉でもあります。御言葉は、まるで狙ったかように「終わり」について語るのです。ですから、そういう意味で、私たちが古い自分という衣を脱ぎ捨て、新しい自分を迎えるためにも、イエス様がこの日私たちに直接何を語っているのかを知ることがとても大切なことです。それゆえ、牧師としては、こういうところでどうしても聖霊の働きを感じざるを得ないのですが、皆さんは、いかがでしょうか。

さて、では、この一年を一言で言えばどういうものだったのでしょうか。その見方はいろいろあると思いますが、その中で一つだけはっきり言えることがあります。それは、私たちが御言葉に導かれながら歩んだということです。それゆえにまた、私たちは、この一年、御言葉に対しどれだけ「誠実」であったかを考えなければなりません。つまり、こうして終わりを迎えるに当たって、自分自身が御言葉に対し、また、神様に対しても、もちろん、イエス様に対しても、本当に日々「誠実」であり得たのかということです。そして、その答えは、もちろん「YES」、と言いたいところですが、大

方は「NO」と仰るに違いありません。神様を前にし、私たちはそんな自信家ではないからです。ただ、「NO」と言うことに悲観的になりすぎる必要もありません。なぜなら、「NO」と口にできるのは、問題の本質がはっきり見えているからです。ですから、気がついていていられるわけですからそれを改めれば済むだけの話です。しかし、その一方で、「全く分からない」と仰る方もいることでしょう。それは、自らに対し下すその評価が本当に正しいかどうか迷いがあるからです。そして、そう考えることは、私たちが神様でもイエス様でもない以上、とても正しいことだとも言えるのでしょうか。それゆえにまた、そうした姿勢は謙虚さを求める御言葉の姿勢とぴったり合っているとも言えるのでしょうか。ですから、明確な態度を示せない、あるいは示さないということは、それは優柔不断な印象を与えるものでもあります。謙虚さという意味では、信仰的だとも言えるのでしょうか。

ただ、そのように自らを見つめる方にとっては、明確なことを口にできる方の言葉には異論を唱えたくもなるのでしょうか。そこで、その人たちに異論を突きつけられれば、聞く耳のある人はたちまちのうちにその思いを打ち砕かれることにもなるのでしょうか。また、聞く耳を持たない人は、異論を打ち消そうとして激しく言い争うことにもなるのでしょうか。こうして、はっきりとした答えを持たない人々の誠実さが、はっきりとした答えを持つ人々を巻き込み、問題を複雑でより深刻なものとしていくのです。そして、そのような状況に陥るのは、この「誠実」であるかどうかの問いに対して、私たちが絶対の確信をもっていないからです。それゆえ、問われたことへの答えがきちんとなされない以上、私たちは自分自身にけじめをつけられないまま一年の終わりを迎えることにもなるのですが、ただ、まさにこの決められない状況の中で語られているのがこの日のイエス様のお言葉でもあるのです。

先週も申し上げたように、イエス様が私たちに求めておられることは生活者の視点です。つまり、私たちの信仰が本当にイエス様と共にある暮らしに根ざした

ものであるかどうか、私たちに問われていることはこのことでもあるからです。従って、忠実であるか否かは、信仰によって生きる私たちのこの暮らしを、私たちがこの一年どこまで大切にしてきたのかということなのです。けれども、大切にすることということもそうですし、愛することということもそうです。けれども、そもそもこのところで言えば、それは何点取れば合格かという性質のものではありません。暮らしそのものが信仰であり、信仰そのものが暮らしであるわけですから、そもそもこのところで言えば、すべてが合格点をいただけるはずだからです。ただ、このように申しますと、多くの方は、それがためにまた不安に駆られることにもなるのです。私たちが及第点をついっつい気にしてしまうのはそのためでもあります。ただ、だから、何も気にせずのほほんと過ごせばいいということではありません。私たちに求められていることはたくさんありますし、また、応じなければならぬものも数多くあるからです。なぜなら、私たちの生活、暮らしというものは、ゴミ出し然り、洗い物然り、お風呂掃除然り、そういう私たちの日々の様々な努力によって成り立っているものでもあるからです。

ですから、イエス様が仰ることは全て、そういう意味で私たちの生活と直結しているのは間違いありません。そして、それは、私たちが決められない状況に生きていますからでもあります。従って、ここでイエス様がおっしゃっていることは、私たちの生活の中で現に起こることでもありますし、また実際に起こりうるものということなのです。それゆえ、イエス様のここでの言葉は、私たちにとってそれだけに重い言葉だと言えるのですが、ただだから、私たちはイエス様が仰るようにならざるを得ず、また、良い実を確実に見分けられる力を身に付けなければならないのです。つまり、「私に向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけにはない。私の天の父の御心を行う者だけが入るのである」とイエス様が仰るように、御心を行うことを肝に銘じて、実際に御心を行動に現さなければならないということなのです。なぜなら、イエス様の仰ることが、私たちの生活を形作っていくことにもなるからです。それゆえ、このことは、この日だけですまされることではありません。

私たちはこの日、このイエス様のお言葉にこうして聞いているわけですが、そ

の私たちの生活を築き上げるものはこの日の御言葉だけではありません。私たちが週の初めに神様の御前に集まり、こうして神様を礼拝し御言葉に聞いているのは、神様の御言葉が自分たちの暮らしを形作り、また、その暮らしを支え続ける力となるからです。ですから、私たちが御言葉によって励まされ、それぞれの馳せ場へと送り出されるのはそれゆえのことでもありますが、それゆえにまた、一巡りの歩みを終えて、再び、主の御前に喜んで集められることになるのです。そして、この繰り返しの途中で作り上げられるものが私たちの暮らしであり、一年でもあるのです。ところが、御言葉によつて、そのように意気揚々と送り出された私たちがでありながら、早い人は教会の玄関を出た途端に、その日の御言葉がどこかに行ってしまうというのです。ですから、時折、耳にする言葉は、そんな皆さんのぼやきでもありますが、しかし、そうであればこそまた、御言葉に聞き、祈ることが私たちにとってとても大事にもなってもくるのです。ですから、これは、私の若い頃、ぼやく私自身にかつてある牧師先生が仰ったことでもあります。ぼやく人には、ならば、聖書研究祈禱会に出席してはどうかとお勧めをするのです。それは、礼拝で受けた恵みを三日で終わらせないためでもあります。ですから、聖書研究祈禱会がどこの教会でも歴史的に週の半ばに行われてきたのは、神様の御心を三日坊主で終わらせないための、いわば私たちの生活の知恵だとも言えるのでしよう。

ということでもありますので、かつて、礼拝と聖書研究祈禱会が信仰の両輪と言われたように、この二つのことが私たちの生活そのものを築いていくのは間違いありません。それゆえにまた、かつて私たちの親世代がそうであったように、ぼやく前に御言葉にきき、祈ることが何より大切なことだと言えるのでしよう。ですから、ぼやきたくなるときには、水曜日の聖書研究祈禱会に是非一度足を運んでみてはとお勧めしたいのですが、ただ、私にも身に覚えのあることではあります。初めてのことはハードルが高く、それゆえにまた、それを続けるのはなかなかしんどいことだとも言えるのでしよう。飛び込んでみたものなかなか続かない、それはまさに、先ほど申しましたように、私たちが決められない状況に生きていますからです。ならば、それを続けるにはどうすればいいのか。この日のイエス様のお言葉はそんな私た

ちに大切なことを語ってくれているように思います。そして、それが、私たちが終わりをどう見つめればいいのかということ。それは、私たちが御言葉に聞き、祈りを合わせるの、私たちが終わりをしっかりと見つめるためでもあるから。なぜなら、まだ終わりを迎えたわけではない私たちにとって、終わりをしっかりと見つめることは、今を見つめ、今を生きるということでもあるから。

ただ、それを続けるには多少の努力が求められもします。それは、イエス様が今日の最後のところで「そのとき、私はきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、私から離れ去れ』」と仰るよう、かなりの緊張感をもって続けるべきものでもあるから。ただ、このイエス様のお言葉は私たちにとっては直接的には身に覚えのないこと。なぜなら、この言葉は、ここで偽預言者と言われている人々に語られたものでもあるから。けれども、その厳しさだけはよく分かる、それだけに、返って怖じ気づいたりもするのですが、しかし、御言葉をよくご覧いただければお分かりのことと思えますが、ここで語られていることは、私たちと全く無関係なものではありません。なぜなら、このイエス様のお言葉は一体どこで語られているものなのでしょう。山上の説教と言われるこの箇所も、いよいよあと少しで終わりを迎えるようとしていますが、このイエス様のお言葉に聞いているのは、弟子たちはじめ、大勢の人々でありました。そして、その中の1人が私たちであり、私たちは同じ場所でこのイエス様のお言葉に聞いているのです。ですから、今は身に覚えのないと思えても、イエス様から「私から離れ去れ」といつ言われてもおかしくなく、それは、私たちが決められない状況にあるから。ただ、それだけにまたこの決められない状況をどうすれば脱することができるか、それが私たちの課題だとも言えるので。それは、白黒ははっきりさせて、新しい年へと向かうためでもあります。なぜなら、はっきりすることができれば、いかがわしい言葉に惑わされることなく、清々しい気分に進むことができると思えるから。また、何よりも、イエス様から「お前のことは知らない。離れ去れ」などと厳しい言葉を投げかけられることのないから。

では、それにはどうすればいいのか、

そこでイエス様が仰ることは、「主よ、主よ」と唱えてはならないということでもありました。ただ、もちろん、「主よ、主よ」と叫ぶこと自体が間違っているわけではありません。では、一体何がいけないのか、それは、この決められない状況をそれがためにまた自分の力で変えようとするということです。そして、その傾向が最も顕著に現れるのが終わりを迎えるとしたその時です。それは、後ろ髪引かれる思いは誰にでもあるから。つまり、このように終わりを終わりとして受け入れることはそれだけに難しいことだということ。ですから、私たちが自分の思い通りに物事を整えたいと思うのはそのためでもあります。まただから、この思いに私たちが囚われてはならないとイエス様は仰るのです。それは、終わりがいつ訪れるかは、神様がお決めになることであって、誰にも決められることではないから。まただから、仮にそれがいつ訪れるかが分かったとしても、私たちにはすぐにはその全てを納得できないのです。

従って、私たちがなかなか物事を決められないのは、神様のなさることに納得がいけないからでもあります。まただから余計に自分の思い通りに物事を運びたくもなるので。ですから、偽預言者の活躍の余地が生じるのはそのためでもあります。ただ、私たちが偽預言者の言葉に引きつけられるのは、彼らが悪意に満ち溢れているからではありません。終わりを迎えた際に、彼らの多く者が「御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡を行ったではないか」とこうイエス様に訴えるのだろうと、イエス様ご自身が仰るように、彼らの発言の背後にあるのは、ある意味で善意に満ちたものだから。しかし、彼らのその善意は、明らかに私たちを間違った方向へと導くものでもあるのです。ですから、この私たちの思い違いを見ることは、イエス様にとってはとても辛く悲しく、心の底から痛みを覚えることでもあるので。なぜなら、そこで山上の説教におけるイエス様の第一声を思い出していただきたいのですが、私たちに向かって「幸いなかな」との呼びかけをもってこの山上の説教を始められたのがイエス様でもあるから。しかも、その私たちのことをイエス様は地の塩、世の光とまで呼んでくださっているのです。このことはつまり、「幸いなかな」と呼びかけられている私たちは、イエス様にとっては特別

な存在であり、それゆえ、イエス様にすべてをお任せすることができるのです。つまり、自分の力に何一つ頼る必要はないということです。ところが、その私たちが神様とイエス様ではなく、それ以外のものを頼ろうとしてしまう、縋ろうとしてしまうわけです。従って、イエス様がここで厳しい言葉を私たちに投げかけるのはそのことを気づかせようとしてのことでもありますが、それは、私たちがいずれ必ず終わりを迎えなければならないからです。

今の私たちがそうであるように、御心を知りつつ終わりを迎えなければならないというこの状況は、私たちに、ああするんじゃないやなかった、こうすればよかった、実に様々な思いを抱かせるものです。それは、私たちがそれだけ難しい現実を生きているからで、また、決められないのはそのためです。ですから、それについて、御言葉は次のように言っています。「人は、裸で母の胎を出たように、裸で帰る。来た時の姿で行くのだ。労苦の結果を何一つ持っていくわけではない。これまた、大いに不幸なことだ。」とコヘレトはこう言うのです。そして、これが私たちの生きる現実であり、つまり、この悲しみと痛みを取り除こうとして足掻き、そして、何一つ思い通りにならないのが私たちが置かれた現実であるということです。ですから、そのためにまた、私たちは偽預言者の心地よい言葉を求めてしまう。まただから、良い木か悪い木かも分からないままその実を口にしてしまうのです。しかも、その答えはすぐには分からない。分からないうちからまた、よりはっきりとしたものを求めてしまう。私たちはこうして何も決められないままに終わりを迎えることになるのですが、そこでそんな私たちの心に響く言葉がこの日のイエス様のお言葉でもあるのです。

私たちに向かって投げかけられているイエス様のこの厳しさは、私たちに不幸に突き落とすものではありません。この世の痛み、苦しみ、悲しみを抱えながら生きるしかない私たちにとっての唯一の希望は、私たちのこの現実にはイエス様が共にいてくださっているということです。そして、ここでの厳しさはそのことを私たちに明らかにしてくれているのです。私たちはこの世の痛み、この世の悲しみをすべて自分の力で取り除くことはできません。それゆえにまた、悲しみを募らせるしかないのです。そういう意味では、偽預言者は、この世の徒花です。

私たちがそれを期待し、また望んでいるからです。また、それだけではありまへん。私たちの多くが時に偽預言者のように振る舞ってしまうのは、終わりを見えないからです。けれども、本質を見誤ったその言葉に誰が慰められるのでしょうか。ただ、その原因は、神様がこの現実をすぐに変えようとはなさらないからです。けれども、神様はその中で本当に何もなさらなかったのでしょうか。

この悲しみと痛みの現実にはイエス様をお遣わしになり、この神の子と私たちが、どこまでも共にあることを決断されたのが神様でありました。それは、ただ抱えるしかない私たちの苦しみと悲しみをイエス様に受け止めさせ、私たちの見立てとは異なる別の確かなものを明らかにするためでもありました。なぜなら、この誰も引き受け手のない悲しみを、共に悲しみ、共に苦しむ者がいるからこそ、悲しむ者、苦しむ者は、嘘誤魔化しのない神様の温かみを感じて、新たに歩み始めることができるからです。ですから、私たちにとっての終わりとは、自身が納得のいくように終わることではありません。自分自身に自分でけじめをつけることではなく、もちろん、けじめは大事なことはありませんが、その痛みと苦しみを引き受けてくださるイエス様の温もりを感じつつ、全てを神様とイエス様にお任せし、次へと進むこと、それが終わりを迎えるということでもあるのです。なぜなら、御言葉が私たちに教えることは、イエス様ゆえにすべての者が神様の救いに与り、それゆえにまた、安心して、また堂々と終わることが許されているという事でもあるからです。

終わりを迎え、後ろ髪引かれる思いは誰にでもある事です。そして、その思いをふりほどくことは簡単な事ではありません。まただから、イエス様はあえて厳しいことをおっしゃるのです。それは、この私があなたと共にある、あなたの苦しみと悲しみはすべて私が引き受けた、最後の時を迎えた私たちにイエス様がその思いの丈を打ち明けてくださっているのは、決められない私たちとイエス様がどこまでもどこまでも共に歩み続けてくださっているからです。ですから、イエス様のこの強い思いの中にあることを忘れずに、この一年にあったことをしっかりと心に留め、後ろを振り返らずその思いの全てをイエス様にお委ねして、新しい歩み始める私たちでありたいと思います。祈りましょう。